

## 想定外の招き

丸山 勉

### [聖書] 士師記 11章 1～11節

ギレアドの人エフタは、勇者であった。彼は遊女の子で、父親はギレアドである。ギレアドの妻も男の子を産んだ。その妻の産んだ子供たちは成長すると、エフタに、「あなたは、よその女の産んだ子だから、わたしたちの父の家にはあなたが受け継ぐものはない」と言って、彼を追い出した。エフタは兄弟たちから逃れて、トブの地に、身を落ち着けた。そのエフタのもとにはならず者が集まり、彼と行動を共にするようになった。しばらくしてアンモンの人々が、イスラエルに戦争を仕掛けてきた。アンモンの人々が戦争を仕掛けてきたとき、ギレアドの長老たちはエフタをトブの地から連れ戻そうと、やって来た。彼らはエフタに言った。「帰って来てください。わたしたちの指揮官になっていただければ、わたしたちもアンモンの人々と戦えます。」エフタはギレアドの長老たちに言った。「あなたたちはわたしをのけ者にし、父の家から追い出したではありませんか。困ったことになったからと言って、今ごろなぜわたしのところに来るのですか。」ギレアドの長老たちは、エフタに言った。「だからこそ今、あなたのところに戻って来たのです。わたしたちと共に来て、アンモン人と戦ってくださるなら、あなたにわたしたちギレアド全住民の、頭になっていただきます。」エフタは、ギレアドの長老たちに言った。「あなたたちがわたしを連れ帰り、わたしがアンモン人と戦い、主が彼らをわたしに渡してくださるなら、このわたしがあなたたちの頭になるというのですね。」ギレアドの長老たちは、エフタに言った。「主がわたしたちの一問一答の証人です。わたしたちは必ずあなたのお言葉どおりにいたします」と答えた。エフタはギレアドの長老たちと同行した。民は彼を自分たちの頭とし、指揮官として立てた。エフタは、ミツパで主の御前に出て自分が言った言葉をことごとく繰り返した。

### [序] 神様を信じる生活と戦い

神様を信じるということは、心の平安を得ることであると私たちは考えやすいと思います。もちろんそれは間違いではないのですが、聖書を読むと、様々な人物が、むしろ神様を信じるが故に、難しい場面に直面させられたり、人生の戦いとも言える事柄に真向かうことになっていることを知らされます。神様を信じるということは、必ずしも「波風が立たない一生を過ごす」ということではなく、どのような人生の試練の中にあっても独りではないという、私を「支える方」を知ることではないでしょうか。

新約聖書のイエス様の弟子たちの姿もそうでありましたし、今日から読み始める旧約聖書の士師記に登場してくる人物たち、士師たちもそうでありました。今月はその中でも二人の士師にスポットを当てて、そこから神様からの語り掛けを聞いて

ゆきたいと思います。その二人のうち一人は**エフタ**です。もう一人は**サムソン**です。今日と来週は、士師記 11 章に記されているエフタについてまず取り上げます。どちらかという、普段あまり読まない箇所かもしれません。

## [1] 士師記の背景

そもそもこの**士師と呼ばれる人**たちはどのような人たちだったのでしょうか？イスラエル部族は、**ヨシュア**に率いられてカナンの地に入り、そこで生活するようになりました。遊牧の民が、その土地で生きるように変わる中で大きな問題が出てきました。もう大リーダーだったヨシュアの死後、これまで唯一の神ヤーウエに忠誠を尽くしてきたイスラエルの民が、**その土地の神々**（代表的な偶像は**バアル神**）になびくようになり、まとまりが失われ、生活も墮落しました。そういう中で、回りの異民族からイスラエルの民は戦いを仕掛けられるようになっていったのです。

そして、**異民族による支配**を経験すると彼らはやっとな悔い改めて、再び神様に救いを求めるようになると神様は「**さばきづかさ**」と呼ばれるカリスマ性を持ったリーダーを立てられてその苦境から救われる、という歴史が幾度となく繰り返されました。その**指導者**、また、**救助者**の役割を担ったのが、**士師たち**です。士師記には**12人の士師たち**が次々に登場してきます。逆に言えば、それだけ**安定しなかった時代**だったとも言えるわけです。士師記の 21 章の最後には、このような言葉が記されています。「**そのころ、イスラエルには王がなく、それぞれ自分の目に正しいとすることを行っていた。**」(士師 21:25)

## [2] エフタという人物

その士師記の中でも、この**エフタという人物**はかなりユニークな人物です。11 章を見ると、彼は普通の結婚で生まれた男子ではなく、「**遊女の子**」であり、それゆえ父親の財産を受け継ぐことが許されず、「**追い出され**」て、彼は自分の兄弟たちから**逃れて**、**トブ**という土地で過ごすようになりました。そして、そこでは、**ならず者の集団の首領**として活動していたようです。ある説明によると、**強盗団のかしら**ということらしいです。そして 11:1 を見ると「**勇者**」だったとありますから、腕っぷしは強く、戦術にも長けていたのだと思います。敵には回したくない人物として恐れられていたのではないのでしょうか。

ところが、**アンモン人**がこの**ギレアデの領土**に侵入してきた時、**ギレアデの長老**たちはこのエフタを訪ねて、是非、指揮官となってアンモン人と戦って欲しいと懇願するのです。この時の**エフタの気持ち**はどうだったのでしょうか？—それは 7 節にもあるように、「俺を追い出しておいて、虫が良すぎないか。こういう時だけ、俺を表舞台に引っ張り出すのか」といったような気持ちでした。けれども、ギレアデの長老からすれば、もうエフタよ、あなたしか頼る者がいない、何とかあの敵と戦って欲しいのです、勝利を収めた暁には、あなたには私どものかしらとなって頂きます、

と、強く願います。

そのあとどうなったか。こう記しています。11:9 以下です。「エフタは、ギレアドの長老たちに言った。「あなたたちがわたしを連れ帰り、わたしがアンモン人と戦い、主が彼らをわたしに渡してくださるなら、このわたしがあなたたちの頭になるというのですね。」ギレアドの長老たちは、エフタに言った。「主がわたしたちの一問一答の証人です。わたしたちは必ずあなたのお言葉どおりにいたします」と答えた。」

エフタは、ある見方をすれば、都合よく「**担がれた**」と言えるのかもしれませんが。けれども、政治的と言うか、人間的にはたとえそうだとした場合、この出来事の背後に主なる神様がおられることをエフタは冷静に受け止めていたのではないのでしょうか。ギレアドの長老たちも「**主がわたしたちの一問一答の証人です**」と言いましたが、11 節の言葉にもそのエフタの信仰が表れていると思うのです。

「エフタは、ミツパで主の御前に出て自分が言った言葉をことごとく繰り返した。」

「**主の御前に出て**」とあります。彼は、自分の不遇な身の上を嘆く事ではなく、また恨むことではなく、(そのような時もあったのかもしれませんが)、この歴史を貫き、今、自分をも用いようとされる神様のお働きの不思議さ、大きさをかみ締めていたのではないのでしょうか？ 実際、この後の 12 節以下を読みますと、初め彼は平和的に使者を送って対話しようとしています。エフタとは、「開く」という意味があるようです。彼は信仰を持って事柄を「開こう」と試みようとした人物だったのです。その後のことは来週ご一緒に見てみたいと思いますが、私が興味深く思うのは、**神様はそのご計画を進められるためには、色々な人を用いられる、というその事実**です。エフタは強盗団のかしらだったのですから。

### [3] 自分のエンジンで走らないこと

この「士師記」には、士師たちが 12 人記されています。もしかすると、実際には更に多くの小士師たちがいたのではないかと、言う学者もいます。そしてそれぞれの士師の活動期間というのは、何十年という割合長い者もいれば、短期間も者もいます。それでも皆神様にある時呼ばれて、**その役割、使命**を果たしたのです。

随分前ですが、笹森建美という日本基督教団の牧師が『旧約聖書に聞く一神の選び、人の応答—』という本を書かれて、その中で、このようなことを笹森牧師は書いておられ、面白いなあと思いました。

「忘れてはならないのは、士師記には、名前のほか、ほとんど何も記されていない士師たちもいることです。彼らは特に外敵と戦って輝かしい戦果を挙げなかったようですが、より大事なことは彼らは**信仰を持って、平和のうちに、民を指導した**ということです。モーセ、ヨシュアの信仰を、沃地でも守り通した大切な役割を果たしたわけ、もしかしたら、英雄的な目覚しい働きをした士師たちよりも、**このような隠れた士師たちのほうが大事な仕事をし、有名な人々を支えてきたの**かもしれません」と。

つまり、彼らは神様から与えられた自分の分を、誠実に担って生きたのです。「名」を残すというような**野望とは無縁**だったのではないか、と思います。

今日本では、自民党の総裁を決める選挙が行われようとしていますが、選挙の前には立候補がありますね。大抵、どの選挙も立候補制です。しかし、聖書の中の神様に用いられた人物というのは、「**神様が**」お立てになった者たちです。**モーセ**や或いは**エレミヤ**であっても、初め神様から呼ばれた時は尻込みしているのです。「**想定外**」の呼び出しに、言葉を失い、慌て、むしろ**その招きを断っています**。しかし、このところが大事ですね。信仰というものは、**自分のエンジン**で走り続けるのではなく、**神様に明け渡して、神様に舵取りをして頂くもの**なのだと思います。自分でやろうとするのは、勇ましく良いように思えますが、それは基本的に**不信仰**なのですね。これは、牧師とされたばかりの**私自身**にも、今問われていることだと思わされています。

#### [4] 「主の晩餐」は、私たちの信仰の原点

先ほど、「12人の士師たち」と言いました。**12**という数はとても不思議です。イスラエルの部族も**12**部族。また、新約聖書に目を転じてみれば、イエス・キリストが祈りの中でお選びになったのは「**12弟子**」でした。

今日は、後程この礼拝の中で、「**主の晩餐式**」を執り行います。ご存知のように、これは、イエス・キリストが十字架に架かれる前日、イエス様が**ご自分の12人の弟子たち**を集め、招いて、**その食卓を設けられたこと**に由来しています。**マタイ**による福音書にはこのように記されています。26：26～29。

「一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱えて、それを裂き、弟子たちに与えながら言われた。「**取って食べなさい。これはわたしの体である。**」また、杯を取り、感謝の祈りを唱え、彼らに渡して言われた。「**皆、この杯から飲みなさい。これは、罪が赦されるように、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である。言っておくが、わたしの父の国であなたがたと共に新たに飲むその日まで、今後ぶどうの実から作ったものを飲むことは決してあるまい。**」

ともするとクリスチャンたちにとっては当たり前になってしまっているかもしれませんが、これは味わえば味わうほど、**実に不思議な食卓**ではないでしょうか。パンをを裂いて与えながら「**これはわたしの体だ**」と言い、ぶどう酒の杯を渡しながら、「**これはわたしの血だ**」とおっしゃる。そしてそれを食し、それを飲みなさいと勧められる。そして、この晩餐式は、イエス様の思い付きで行った事ではありません。いえ、イエス様がこの地上においでになられた目的は、**弟子たちを招いてこの晩餐式を行うこと**だった、とさえ言っても良いのではないか、と私は思います。

これは、かつて神様がくすしき御手で、**イスラエルの民をエジプトからの奴隷状態から救い出された**、そのことを記念する大切な「**過越しの食事**」を毎年していましたが、

この日はイエス様自らが、場所（二階座敷）も含めて、その食卓のご計画を進めておられたのです。ルカによる福音書では、22:14 以下にこう記しています。

「時刻になったので、イエスは食事の席に着かれたが、使徒たちも一緒だった。イエスは言われた。「苦しみを受ける前に、あなたがたと共にこの過越の食事をしたいと、わたしは切に願っていた。言っておくが、神の国で過越が成し遂げられるまで、わたしは決してこの過越の食事をとることはない。」

イエス様は、「あなたがたと共にこの過越の食事をしたいと、わたしは切に願っていた」と言われるのです。なぜでしょうか？もちろんお腹がすいたからではありませんよね。イエス様は、あなた方と私のつながりは、この晚餐式で目に見えるようにハッキリと示されるのだよ、それは、あなた方は、わたしの十字架の愛で生きるのだよ、十字架の愛をしっかりと心に刻み、もっと言えば、あなたの体の中にまで入れて生きるのだよ、という、そのことを「体験」させたかったのではないかと思います。

この翌日、イエス様は十字架に架かられます。ですから文字通り、「最後の晚餐」なのです。だから、イエス様は一番大事なことを伝えたかった。残したかった。けれども弟子たちにとっては、この時点でそれがどれほど尊い食事なのかは解りませんでした。ですから、そんな食事の席でさえ、ルカによる福音書の続きを読みますと「使徒たちの中で誰が一番偉いだろうか」などどいう議論が起こったというのですから、イエス様の思いというのは、全く見えていなかったと思います。自己中心なのです。自己中心でしか生きることが出来ない私たちなのです。十字架に迫りやったのは、歴史的には当時の権力者と言えるのかもしれませんが、本質的には自らを神として、主を受け入れられない、いえ、神様を邪魔者とする私たちの「罪」なのです。

しかし、だからこそイエス様は、裏切る弟子たちを招いて、この過越しの食事を何としてでもと行いたいと切に望まれていたのではないのでしょうか。それは裁くためではありません。不信仰な弟子たちを「受け容れる」ためにです。この晚餐の振る舞いを通して、主がどれだけの愛を持って、あなた方を愛しているか、それを悟って欲しいがために用意された食卓なのです。

使徒パウロは、コリントの信徒への手紙一の 11 章で、主の晚餐について詳細に記し、それが今日の主の晚餐式の制定の言葉として用いられていますが、その中で、イエス様がパンを裂き、杯を渡す際に、イエス様は「わたしの<記念>としてこれを行いなさい」と言われたと記しました。<記念>と言うと、<記念碑>のように、何か昔の出来事を忘れないためと捉えがちですが、それ以上のものがあると思います。一言で言うならば、それは過去の想起にとどめるのではなく、「インマヌエル」=わたしはあなたと共にいます、という、今この時の事実、それが<記念>だと言ってよいの

だと思えます。＜記念＞とは本来そういうものです。パンと杯をあなたが受けることで、私の愛が、もっと言えば、私自身が、あなたの中で生きはじめるのだ、いや、もう既に生きている、ということに気付くのだ、ということではないでしょうか。

#### 〔結〕 晩餐を受ける「ふさわしさ」

私たちは、信仰者と言っても立派な存在ではなく、弱い存在です。そのような事をイエス様はよくご存知でした。12 弟子、ダメダメ君ばかりじゃないですか？ペトロしかり、トマスしかり、イエス様が十字架に架かれた時には皆逃げてしまった。イスカリオテのユダに至っては、イエス様を銀貨 30 枚で売り渡してしまったのですから！

けれども、私たちはここで単純な事実気がつくのです。あの主の晩餐式にいなかった弟子は一人もいないのです。何故でしょうか？イエス様が、一人残らず、招いておられたからです。あなたもわたしの愛のうちにいる！ペトロも、トマスも、そして、」イスカリオテのユダもです！確実にそこにいた。ただ、悲しいかな、自分でその愛を振り切ってしまった。自分で自分の始末をつけてしまった。ユダの悲劇というのはそれだと思えます。

パウロは申しました。「あなた方は、このパンを食べ、この杯を飲むごとに、主が来られるときまで、主の死を告げ知らせるのです」と。神様が結んでくださった新しい愛の契約。それをあなた方は、これを守ることで証しするのだ、と言うのです。

そして「ふさわしくないままでこれを食するものはその身にさばきを負う」と、制定文の中でも語られますが、勘違いしないようにしたいと思います。「私はもうこれで立派なふさわしい信仰者となったので受けられる」と思ったら、それは一番イエス様の心に遠いですよ？そうではなく、自らはこの主のご愛を受けるにとっても値しない者だ、しかし、その者のためにあなたはご自分の命を差し出して下さったのですね」と、悔い改めと、心を開くこと、それこそが主の晩餐を受ける「ふさわしさ」なのではないでしょうか？

このキリストの命、愛を頂く私たちは、たとえ試練がやってきても、それを安んじて受けて生きることが出来るはずです。主は仰いました。「あなた方には世で苦難がある。しかし勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている」（ヨハネ 16:33）と。

—ご一緒に味わいましょう。主の恵み深さを。

お祈りを致します。